

アメリカの源流：American Indian はどう扱われて来たか—中学校・高等学校から大学へ—

佐々木 隆

プロローグ

筆者はこれまで中学校・高等学校の教科書に記載されている「ケルト文化」⁽¹⁾、「人種のるつぼ」「サラダボウル（論）」⁽²⁾に注目し、大学での講義との連携について考察してきた。

言葉や用語は時代により意味の追加、変化が行われることがある。特に外国語の変容が日本語に定着するまでには時間がかかる。検定教科書ではその変化が反映されるまでには時間がかかる。ここでは“Indian”（インディアン）を“Native American”（ネイティブ・アメリカン、先住アメリカ人、アメリカ先住人、アメリカ先住民）となるプロセスを中学校・高等学校の教科書から明らかにしたい。しかし、本当にこの“Native American”という考え方がふさわしいのか、それとも“American Indian”がふさわしいのか、大学ではどのように取り上げるべきかを考察したい。

1 “Indian”

インディアンと言えば、西部劇では騎兵隊と共に登場するお馴染みのものであった。しかし、現在では「インディアン」という表現はほとんどされず、アメリカ先住民、native American（ネイティブ・アメリカン）と呼ばれる。しかし、2004年9月21日には国立アメリカ・インディアン博物館（National Museum of the American Indian）も開館し、ここでは文字通り「アメリカ・インディアン」という表現となっている。一般的に「インディアン」とはどのように思われているのだろうか。

新村出編『広辞苑』（2018、第7版）を見てみよう。

- ① インドの。インド人。
- ② アメリカ・インディアン。⁽³⁾

もうひとつ、「インディオ」も同じく調べてみると次の通りである。

アメリカ先住民の別称。特に中南米でいう。⁽⁴⁾

“Indian”は英語、“indio”はスペイン語である。

これではかなりおおざっぱである。インターネット上の定義を見てみよう。一般的ということからここでは「ウィキペディア」より、その冒頭部分のみ紹介しておきたい。

インディアン（英: Indian）は、アメリカ先住民（ネイティブ・アメリカン）の大半を占める主要グループの一般的な呼称。スペイン語・ポルトガル語ではインディオ（西: indio）。インディアンとインディオともにインド人に由来するが、日本語では、メキシコ以北の諸民族をインディアン、ラテンアメリカの諸民族をインディオと呼び分けることが多い。⁽⁵⁾

次にインターネット上の Weblio 英和辞典より “indian” の検索すると以下の通りである。

形容詞

- 1 インドの; インド人の。

2 アメリカインディアン; アメリカインディアンの言語の.
名詞

1 可算名詞 インド人 (cf. Hindu).

2 a 可算名詞 アメリカインディアン 《★【解説】 アメリカに住むインディアンはインド人と区別して正確には American Indian というが、現在では Native American という呼称が好まれる; Indian の名は 1492 年にアメリカ大陸に到達したコロンブス (Columbus) がそこをインド (India) と思い込んだことによる》.

b 不可算名詞 アメリカインディアンの諸言語.

[INDIA+ - AN] ⁽⁶⁾

筆者がまだ中学・高校生の時には「インディアン」という用語であったと記憶しているが、大学に入ってから「ネイティブ・アメリカン」といった用語に触れたのではないかと思える。現在の大学生は中学校・高等学校の段階で「インディアン」と「ネイティブ・アメリカン」(アメリカ先住民)の両方を学んでいる。

2 中学校の教科書に登場する“Native American”の取り扱い

中学校の「社会」は「地理的分野」「歴史的分野」「公民的分野」に分かれており、ここではその内容から「地理的分野」に注目しておきたい。

安倍能成監修『中学社会1 地理的分野』(日本書籍、1968年1月)

「インディアン」 記載あり

→「東部の生活にあきたらない人々は、原住民(インディアン)を征服しながら、西へ西へ開拓を進め、19世紀後半には太平洋岸に達した。」(p.281)

→ラテンアメリカの内「住民は、ヨーロッパ人の子孫の白人と、
原住民のインディオおよび黒人のほか、混血も多い。」(p.296)
「ネイティヴ・アメリカン」 記載なし

野村正七・河野重男・佐藤竺他『新訂 中学社会 地理的分野』(教育
出版、1987年1月)(1986年3月文部省検定済)

「インディアン」 記載あり

→「北アメリカ大陸は、先住民のインディアンが野牛狩りをした
り、焼畑耕作を行って生活していた土地であった。」(p.110)

→「ラテンアメリカでは、皮ふの色が黒色・褐色・白色などさま
ざまな人々がいっしょに住んでいる。この地域には先住民であ
るインディオが早くからマヤ・インカ・アステカなど高い文明
をつくっていた。」(p.124)

「ネイティヴ・アメリカン」 記載なし

加藤一郎・石田寛・中山正民他『中学校社会 地理』(学校図書、1993
年2月)(1992年1月文部省検定済)

「インディアン」 記載あり

→「アメリカ大陸の地名 今日のアメ리카大陸の地名は、土地を
開いた人々と深い関係をもっている。

15世紀末、アジア航路の探検にとりだしたイタリアの航海家
コロンブスは、到着したこの土地をインドの一部と思い、住民
をインドの人々、すなわちインディオ(英語ではインディアン)
とよんだ。ついで、同じイタリア人アメリゴ＝ベスプッチがこの
土地に上陸し、新しい大陸であると考えた。その後、かれの
名にちなんで、「アメリカ」とよぶようになったといわれる。」

(p.86)

「ネイティブ・アメリカン」 記載なし

海津正倫他『わたしたちの中学社会 地理的分野』（日本書籍、2006年1月）（2005年3月文部科学省検定済）

(p.121)

「インディアン」 記載あり

「ネイティブ・アメリカン」 記載あり

→「アメリカは50の州からなる連邦国家であるが、各州の名前を調べてみると、下の図のように、先住民のネイティブ＝アメリカンのことばに由来するもののほか、スペイン語やフランス語に由来する州もあり、かつてはスペインやフランスから移住して来た人が多かったことがわかる。」(p.121)

中村和郎他『社会科 中学生の地理 世界のすがたと日本の風土』（帝國書院、2015年1月）（2011年3月文部科学省検定済）

「インディアン」 記載あり

→欄外 「なぜアメリカに多くの民族がくらしているのか、移民に注目してみていきましょう。アメリカインディアンのほかに、エスキモー（カナダはイヌイット）などの人々をさします。」

(p.80)

「ネイティブ・アメリカン」 記載あり

→「北アメリカには、もともとネイティブアメリカンとよばれる先住民が住んでいました。17世紀初め、イギリスが北アメリカの大西洋沿岸に、フランスがカナダのケベックにそれぞれ植民地をつくると、イギリスやフランス、スペインなどヨーロッパの国から、多くの人々が移民としてやってくるようになりました。」

来アメリカにやってきた移民たちの多くは、それまでの先住民が住んでいた土地を自分たちのものにしなが、開拓を進めました。」(p.80)

五味文彦他『新しい社会 地理』(東京書籍、2015年2月)(2011年3月検定済)

「インディアン」 記載なし

「ネイティブ・アメリカン」 記載なし

竹内裕一他『中学社会 地理 地域にまなぶ』(教育出版、2016年1月)(2015年3月検定済)

「インディアン」 記載あり

→「北アメリカには、もともとインディアンなどが暮らしていました。15世紀末以降、ヨーロッパからの移民は、こうした先住民の土地をうばい、農地や牧草地に変えながら開拓を進めました。」(p.83)

→「インディオ」については以下のような記載となっている。

「南アメリカにはインカ帝国など高い文明を築いたインディオとよばれる先住民が暮らしていました。」(p.95)

「ネイティブ・アメリカン」 記載なし

3 高等学校の教科書に登場する“Native American”の取り扱い

ここでは中学校社会の「地理的分野」の継続学習として、高等学校の「地理B」に注目しておきたい。

竹内常行・木内信蔵他『新版 詳説地理』(山川出版、1968年3月)

「インディアン」

記載あり

→「アメリカ合衆国は原住民のインディアンをふくめて、アングロ＝サクソン人を主とするいろいろなヨーロッパ系の移民、アフリカからきたニグロ、アジアからの人々などによって構成されている。」(p.283)

→「コロンブスが発見するまで、アメリカ大陸には、アメリカ＝インディアンにぞくする多くの種族が分かれて住み、採集・遊牧・焼畑耕作などの生活をしてきた。」(p.303)

「ネイティヴ・アメリカン」

記載なし

横田忠夫他『三訂版 高等学校地理 B』(数研出版、1981年1月)(1978年3月文部省検定済)

「インディアン」

記載あり

→「原住民のインディアンは、氷河時代にはまだ連絡していたベーリング海峡を渡って、アジア大陸から移住してきた黄色人種の子孫といわれる。しかし、白人に圧迫され、現在アングロアメリカのインディアンの総数は、約90万人(人口の約1/250)にすぎず、しかも白人社会に適応して生活しているとはいえない。他方、極地のツンドラ地帯には、インディアンよりもずっと黄色人種としての特徴を備えているエスキモーが住んでいる。」(p.200)

→「インディオ」についてはラテンアメリカのところで言及。
(p.203)

「ネイティヴ・アメリカン」

記載なし

矢田俊文他『地理 B』(東京書籍、2003年2月)(2002年3月検定済)

「インディアン」

記載あり

→「北アメリカ諸国のインディアンやエスキモー、オセアニア諸国のアボリジニやマオリにみられる先住民の権利回復運動や、あるいは一国内における居住外国人の文化的権利の主張運動も、今日の地球社会における民族問題を考えるにあたって重要な意味をもっている。」(p.311)

＊「民族問題の現状」内

→「カナダの開拓は、17世紀初頭にケベックを基地にしたフランス人によって始まった。人口の増加にともなって開拓民は内陸へと向かい、開拓地は西へ西へと移動した(西漸運動)。この影響を受けたのが先住だったアメリカインディアンだった。ヨーロッパ移民が西に進むに従い、土地の収奪にかかわる争いがふえ、インディアンの人口は減少し、不毛な土地へと追いやられた。」(p.216)

「ネイティヴ・アメリカン」

記載なし

中村和郎・谷内達他『楽しく学ぶ世界地理 B』(帝国書院、2004年1月)(2003年3月検定済)

「インディアン」

記載あり

→『ラテンアメリカ』は、世界をいくつかに分けた区域区分の一つだけが図4からさらに人口密度が高い地域と低い地域に区分することができる。図5・⑥を見ると、人口密度が低い地域は熱帯林であり、またインディオが多く、混血が進む北部、ヨーロッパ系の多い南部との違いがわかる。以上のことから、図7のような三つの地域に分けることができる。」(pp.176-177)

(図は省略した)

→気になるものとして次のものもある

→「多文化主義 カナダは、複雑な民族構成をもつ連邦国家であ

る。人口の約 2%はカナダインディアンとイヌイットの先住民が占める。15 世紀末からは、おもにイギリスとフランスから移民が渡ってきた。19 世紀の末ごろからは、ヨーロッパ各地やアジアからの移民も増えた。今日では、イギリス系とフランス系カナダ人で、総人口の約 85%を占める。そのなかでも、フランス系カナダ人は東部のケベック州に集中して住んでおり、1960 年代ごろからイギリス系が支配する連邦体制からの離脱を求める運動が高まってきた。それに対抗して連邦政府は、先住民を含む諸民族の共存をめざす多文化主義政策を掲げ、1988 年にはそれを法制化した。」(p.223)

「ネイティヴ・アメリカン」 記載なし

竹内啓一他『新地理 B』(教育出版、2007 年 1 月) (2006 年 3 月検定済)

「インディアン」 記載あり

「ネイティヴ・アメリカン」 記載なし

片平博文・矢ヶ崎典隆他『新詳地理 B』(帝国書院、2013 年 1 月) (2012 年 3 月文部科学省検定済)

「インディアン」 記載あり

→単独項目・名称としての扱いはないが、下記の説明内で記述がある。

「ネイティヴ・アメリカン」 記載あり

→「ネイティブアメリカン 北アメリカの先住民のこと。アメリカインディアンのほかにエスキモー (カナダではイヌイット) なども含まれる。」(p.290)

→帝国書院編集部『新詳地理 B 教授資料 DVD-ROM 付』(帝

国書院、2013年3月)

「◆ネイティブアメリカン (p.290 01~2、用語解説 1)

コロンブスは1492年にカリブ海の島に到達し、インディアス(インドを含むアジア地域)を発見したと勘違いした。その結果、南北アメリカの先住民はインディオやインディアン(ともにインド人の意)と呼ばれるようになった。しかし、これらの用語はヨーロッパ人による支配を象徴するため、最近ではネイティブアメリカンという呼称が一般的である。現在のアメリカ合衆国の領土内には、もともとインカ帝国やアステカ帝国のような強大な国家は存在しなかった。そのためネイティブアメリカンは、それぞれの地域の環境に適応した生活様式をつくり出した。東部の森林地域では農業が、中央部の草原地域や西部の乾燥地域では狩猟・採集が主な生活様式であった。その後、東部からヨーロッパ系の人々による植民地活動が進展するにつれて、ネイティブアメリカンは西へと追いやられた。現在、アリゾナ州やユタ州など西部の内陸地域には、居留地が点在する。伝統的な織物や装飾品の製造は、彼らにとって重要な収入源である。」(p.341)

木畑洋一他『新訂版 世界史B』(実教出版、2017年1月)(2016年3月検定済)

「インディアン」 記載なし

「ネイティブ・アメリカン」 記載なし

→欄外「ジェロニモ 1829~1909 アメリカ先住民。アパッチ族のシャーマン。先住民の軍事的征服政策に抵抗した。最後の族長として有名。居留地におしこめられることをきらった彼は、何度も居留地をぬけだし、一隊をひきいてメキシコ・アリゾナ・

ニューメキシコに出没し、住民を恐怖におとしいれた。アメリカも多くの兵士を投入して追撃したが苦戦し、最終的に、1886年に降伏させた。」(p.294)

山本正三他『新編 詳解地理 B 改訂版』(二宮書店、2017年1月)
(2016年3月検定済)

「インディアン」

記載あり

- 欄外「ことばの整理 ネイティブアメリカンとインディアン」
- 「どちらもアメリカの先住民を意味するが、ネイティブアメリカンにはインディアンのほかにアラスカの先住民やハワイの先住民などが含まれる。」(p.272)
- 本文「先住民であるネイティブアメリカンはもともとアメリカ全域に居住していた。西部開拓では、移民の入植とフロンティアの拡大につれて、先住民はしだいに居住地を奪われ、西部の辺境の地に設けられたインディアン保留地に追いやれた。」(p.272)

「ネイティブ・アメリカン」

記載なし

→上記を参照

高等学校の『世界史』の教科書では記載状況はどうなっているだろうか。該当年よりかなり遡って、すべての教科書ではないが、以下の通り調査した。

三上次男・大野真弓・秀村欣二他『新版 世界史 A』(中教出版、1967年2月)

「インディアン」

記載あり

「ネイティブ・アメリカン」

記載なし

三上次男・大野真弓・秀村欣二他『最新版 世界史 A』（中教出版、1971年2月）

「インディアン」 記載あり

「ネイティヴ・アメリカン」 記載なし

三上次男・大野真弓・秀村欣二他『世界史』（中教出版、1973年2月）
（1972年4月文部省検定済）

「インディアン」 記載あり

「ネイティヴ・アメリカン」 記載なし

三上次男・大野真弓・秀村欣二他『世界史』（中教出版、1979年2月）
（1978年3月改訂検定済）

「インディアン」 記載あり

「ネイティヴ・アメリカン」 記載なし

永井滋郎、藤井千之助他『高等学校 新世界史』（第一学習社、1983年2月）（1982年3月文部省検定済）

「インディアン」 記載あり

「ネイティヴ・アメリカン」 記載なし

永井滋郎、藤井千之助他『高等学校 改訂版 新世界史』（第一学習社、1985年2月）（1984年3月文部省検定済）

「インディアン」 記載あり

「ネイティヴ・アメリカン」 記載なし

平田嘉三他『高等学校 改訂版 世界史』（第一学習社、1990年2月）

(1991年文部省検定)

「インディアン」	記載あり
「ネイティブ・アメリカン」	記載なし

藤井千之助他『高等学校 改訂版 新世界史』(第一学習社、1992年2月)(1991年3月改訂検定済)

「インディアン」	記載あり
「ネイティブ・アメリカン」	記載なし

越智武臣他『高等学校 改訂版 世界史』(第一学習社、1993年2月)(1992年3月改訂検定済)

「インディアン」	記載あり
→「インディアン」と「先住アメリカ人(インディアン)」の混合記載。	
「ネイティブ・アメリカン」	記載なし

二谷貞夫・笠原十九司・油井大三郎他『世界史 B』(一橋出版、1994年2月)

「インディアン」	記載あり
「ネイティブ・アメリカン」	記載なし

鶴見尚弘・遅塚忠躬他『高校世界史 B』(実教出版、1995年1月)(1994年2月文部省検定)

「インディアン」	記載あり
→「先住民のインディアン」という表現がある。	
「ネイティブ・アメリカン」	記載なし

鶴見尚弘・遅塚忠躬他『高校世界史 B 新訂版』（実教出版、1999年1月）（1998年2月文部省検定）

「インディアン」 記載あり
→ 「先住民のインディアン」という表現がある。
「ネイティブ・アメリカン」 記載なし

越智武臣他『高等学校 改訂版 世界史』（第一学習社、1999年2月）（1998年2月文部省検定済）

「インディアン」 記載あり
→ 「インディアン」と「アメリカ先住人（インディアン）」の混在記載。
「ネイティブ・アメリカン」 記載なし

二谷貞夫・笠原十九司・油井大三郎他『世界史 B 新訂版』（一橋出版、2001年1月）（1998年2月28日検定済）

「インディアン」 記載あり
「ネイティブ・アメリカン」 記載なし

向山宏他『高等学校 改訂版 世界史 B』（第一学習社、2007年2月）（2006年3月検定済）

「インディアン」 記載あり
「ネイティブ・アメリカン」
→ アメリカ先住民（ネイティブ=アメリカン）として記載あり。

西川正雄・中村平治他『世界史 B 改訂版』（三省堂、2007年3月）（2006年3月文部科学省検定済）

「インディアン」 記載あり

→「インディオ」も記載もある
「ネイティヴ・アメリカン」 記載なし

鶴間和幸他『高等学校 世界史 B 改訂版』（清水書院、2008年2月）
（2007年3月文部科学省検定済）

「インディアン」 記載なし
→「インディオ」の表現として記載
「ネイティヴ・アメリカン」 記載なし

川北稔・小杉泰他『新詳 世界史 B』（帝国書院、2013年1月）（2012
年3月文部科学省検定済）

「インディアン」 記載あり
→「南北アメリカ大陸の先住民を、インディアン（インディオ）
とよんだ」
「ネイティヴ・アメリカン」 記載なし

木畑洋一・松本宣郎他『世界史 B』（実教出版、2013年1月）（2012
年3月検定済）

「インディアン」 記載あり
→「ヨーロッパ人によりインディオ（インディアン）とよばれる
アメリカ先住民」
→「先住民（インディアン）」
「ネイティヴ・アメリカン」 記載なし

岸本美緒・羽田正他『新世界史』（山川出版、2014年3月）（2013年
3月文部科学省検定済）

「インディアン」 記載あり

→索引に「インディオ (インディアン)」とある
→本文には「インディオ」、「先住民 (通称インディアン)」、「先住民 (インディアン)」、「先住民 (インディオ)」が混在している。
「ネイティヴ・アメリカン」 記載なし

木村靖二・佐藤次高他『高校世界史 B』(山川出版、2014年3月)(2013年3月文部科学省検定済)

「インディアン」 記載あり
→索引に「インディオ」とあり、「インディアン」の表記はない。
→本文に「今日のアメリカ大陸にも上陸したが、これらの土地を『インド』の一部だと思いこんでいたため、先住民を『インドの人』(インディオ〈インディアン〉)と呼んだ。」(p.126)
「ネイティヴ・アメリカン」 記載なし

尾形勇他『世界史 B』(東京書籍、2016年2月)(2012年3月検定済)

「インディアン」 記載あり
→索引に「インディオ」とあり、「インディアン」の表記はない。
→本文に「アメリカ大陸の先住民をさす。コロンブスが誤って、先住民をインディオとよんだ。北米大陸の先住民をさす『インディアン』は、現在は差別語として使われていない(→p.219)。」(p.107)
→「いっぽうメキシコでは、クリオーリョのカトリック聖職者イダルゴを指導者として、インディオやメスティソが蜂起した。」(p.266)
「ネイティヴ・アメリカン」 記載あり
→「北米では英語風にインディアンとよばれたが、現在ではネイティヴ=アメリカンという(→p.107)。」(p.219)

世界史Bよりも地理Bの方が概して説明についてはより深くなっている。特に2000年を越えての教科書は本文に掲載されていなくても、欄外で説明するなど、工夫が見られる以下は教科書ではないが、高校学校用の参考書であるが、見ておきたい。

川畑勝編『ハンドブック 地理の要点整理 改訂版』（学研プラス、2013年7月）

「インディアン」 記載あり

→「アメリカ合衆国」の項目

「①先住民（ネイティブアメリカン） インディアンは、かつてユーラシア大陸と北アメリカ大陸が地続きであった時代にユーラシア大陸から移り住んだモンゴロイドの子孫。エスキモー（イヌイト）は、北極沿岸に居住し、主に狩猟・採集生活を営んでいた。全体の約1%を占める。」(p.225)

→「中南アメリカの歴史と社会」の項目

「①先住民（ネイティブアメリカン）…今から約1.2万年前にシベリアからベーリング海峡を渡って移住したモンゴロイドの子孫。インディオ（インディヘナ）と呼ばれる。ペルー・ボリビア・グアテマラなど、ヨーロッパ系白人の進出が少なかったメキシコ高原～アンデス高地に多い。」(p.236)

「ネイティブ・アメリカン」 記載あり

→上記参照

全国歴史教育研究会協議会編『世界史用語辞典』（山川出版社、2016年11月）

「インディアン」 記載あり

→「Indian④」コロンブスの誤解に由来した、北アメリカ大陸の先住民を指す呼称。東部森林地帯で狩猟を生業としていたが、白人の西漸運動で土地を奪われ、人口も激減した。蔑視的ニュアンスを含んでいるため、現在はあまり使用されていない。」
(p.226)

→「インディオ Indio④」アメリカ大陸先住民の呼称。先史時代に陸続きであったベーリング海峡をとおって、または海路でモンゴロイド系の人々が移住した拡散した。独自の農耕文明を発展させた。」(p.51)

「ネイティブ・アメリカン」

記載なし

以上をまとめると次のような傾向がある。

- (1) 「インディアン」として単に表記するもの。
- (2) 原住民の、先住民の「インディアン」あるいは「アメリカンインディアン」と「もともと住んでいた」点を表現しようとするもの。
- (3) はっきりと「ネイティブアメリカン」と表現するもの。
- (4) 英語の「インディアン」を、コロンブスがもともと話したスペイン語の「インディオ」として表現するもの。
- (5) 北米の先住民を概して「アメリカンインディアン」とし、南米の先住民を「インディオ」と表現するもの。
- (6) 北米及び南米の先住民を「インディオ」と表現するもの。

ここ最近の教科書では(4)を意識して「インディアン」ではなく、「インディオ」と表現していることについてコロンブスにさかのぼり、英語ではなくスペイン語で表記していることに触れ、全体的に(6)での説明が増えている。

4 大学での“American Indian” “Native American” の取り扱い

(1) 大学の講義

筆者が“American Indian” “Native American” に関する内容を扱うのは「英米文学史」の授業科目である。文学を中心に上げる授業科目であるが、時代背景や文化背景について触れることになり、アメリカ文学史を時系列で触れる際にジェイムズ・フェニモア・クーパー (James Fenimore Cooper, 1789-1851) を扱う中で『モヒカン族の最後』 (*The Last of the Mohicans*, 1826) は紹介することになる。特に筆者のこだわりとして、英米文学作品の映画を取り上げており、『モヒカン族の最後』も映画されているので、これについては当然触れることになる。

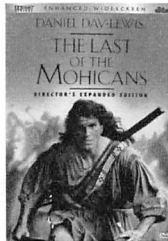
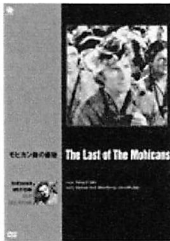
モーリス・トゥールヌール、クラレンス・ブラウン監督『モヒカン族の最後』 (1920、アメリカ)

アルトゥール・ヴェリン監督『モヒカン族の最後』 (1920、ドイツ)

ジョージ・B・サイツ監督『モヒカン族の最後』

(1936、アメリカ)

マイケル・マン監督『ラスト・オブ・モヒカン』 (1992、アメリカ)



また、ディズニー映画でもインディアンのポウハタン族の娘・ポカホンタスが登場する映画がある。マイク・ガブリエル、エリック・ゴール

ドバーク、カール・ビンダー監督『ポカホンタス』(*Pocahontas*, 1995)である。この映画の特徴はハッピーエンディングとなっていないところである。明らかに異人種間の結婚の難しさを扱っていることだ。

「英米文学史」では文字通り、イギリスとアメリカの文学、また、その背景として英米史、英米文学を扱う。特にアメリカの場合には、大航海時代のコロンブスがインドと思ったところが、実はヨーロッパ人にとっては未知の大陸であったこと、そのためその土地の住民をインディオ(スペイン語)／インディアン(英語)と呼んだことからアメリカ先住民をインディアン、あるいはアメリカ・インディアンと呼んでいたことなどは説明が必要である。「人種のるつぼ」「サラダボウル(論)」でも触れたが、アメリカ先住民とは別にヨーロッパから新大陸への移民、さらにはアフリカからの黒人奴隷など、アメリカの建国、さらには現在にまでこの問題が及んでいることは単に文学の世界だけの問題ではない。

(2) 用語や言葉の整理

高等学校の教科書の表記はインディアンが当初主流であったが、その後、原住民のインディアン、先住民のインディアン、アメリカ先住民、ネイティブアメリカンなどと推移している一方、インディオと表現しているものが多くなっている。

「原住民」「先住民」という言い方は英語では“indigenous” “native”を想起させる。“Native American”を日本語に訳す時にどう表現するかといったことも考えると興味深い。英語をそのままカタカナ表記して、「ネイティブアメリカン」(調査した教科書では「ネイティブヴアメリカン」と「ヴ」の表記をしたものはなかった)

先住民を強く意識した表現が教科書に入って来た背景には何があるのだろうか。ここで注目しておきのが日本の先住民に関することだ。アメ

リカの「インディアン」は、日本では「アイヌ」の扱いに類似しているのではないだろうか。首相官邸発信のインターネット上に公開されている「小・中学校教育におけるアイヌに関する教育の充実について」では次のよう文言がある。(7)

1.新学習指導要領(平成 29 年 3 月 31 日告示)において、アイヌに関し
充実した事項

中学校社会〔歴史的分野〕(平成 20 年告示)

「鎖国下の対外関係」については、オランダ、中国との交易のほか、朝鮮との交流や琉球の役割、血方との交易をしていたアイヌについて取り扱うようにすること。

中学校社会〔歴史的分野〕(平成 29 年告示)

「鎖国などの幕府の対外政策と対外関係」については、オランダ、国との交易のほか、朝鮮との交流や琉球の役割、北方との交易をしていたアイヌについて取り扱うようにすること。その際、アイヌの文化についても触れること。

2.文部科学省としての今後の対応について(案)

①◆小学校学習指導要領解説社会(第 6 学年歴史内容)に、アイヌに関する記述を盛り込む。

◆これにより、小学校 6 年生の社会科教科書全てにおいて、アイヌの歴史や文化に関する記述がなされることとなる。

※平成 28 年度第 6 学年供給本：交易は全て(4 社中 4 社)で、文化については 1 社のみ(4 社中 1 社)。

◆指導に当たっては、中学校社会におけるアイヌの取扱いと関連をもたせ、系統的な学習を図る。

- ②◆人権課題としてアイヌの人々への偏見や差別を許さないという指導を充実するとともに、アイヌについては先住民族であるとの「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議(平成 20 年 6 月 6 日衆・参議院本会議)」、「アイヌ文化の復興等を促進するための「民族共生の象徴となる空間」の整備及び管理運営に関する基本方針について(平成 26 年 6 月 13 日閣議決定)」を踏まえ、我が国の歴史や文化の理解の観点から、専門的な知見や経験を有する。有識者等のご意見を聞きながら、教材の充実や教員の指導力の向上などによる小・中学校を通じた教育の充実を図る。

実際の文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』(文部科学省、2017 年 6 月)には以下のような記述がある。

「琉球の文化」や「アイヌの文化」についても触れることとし、学習内容の一層の充実を図った。⁽⁸⁾

.....

「アイヌの文化」(内容の取扱い)については、「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議(平成 20 年 6 月 6 日衆議院・参議院本会議)」、「アイヌ文化の復興等を促進するための民族共生象徴空間の整備及び管理運営に関する基本方針について(平成 26 年 6 月 13 日閣議決定(平成 29 年 6 月 27 日一部変更))」を踏まえ、先住民族として言語や宗教などで独自性を有するアイヌの人々の文化についても触れるようにする。⁽⁹⁾

日本国内の先住民の扱いについてもようやく教科書で取り扱うことになったことを考えると、アメリカの先住民についての取り扱いがそれよりも早いことは疑問を持たざるを得ないところもある。

エピローグ

日本の教科書では先住民としてのインディアンをアメリカ・インディアン、あるいはインディオと呼んでみたり、さらにネイティブアメリカンと記載している事例が多い。では、彼等自身はどう呼ばれたいのか、どう思っているのかという視点が実は全く欠けているのである。ティーチャーズマニュアル、すなわち教授資料を再度見ておきたい。

帝国書院編集部『新詳地理 B 教授資料 DVD-ROM 付』(帝国書院、2013年3月)

「◆ネイティブアメリカン (p.290 01~2、用語解説 1)

コロンブスは 1492 年にカリブ海の島に到達し、インディアス (インドを含むアジア地域) を発見したと勘違いした。その結果、南北アメリカの先住民はインディオやインディアン (ともにインド人の意) と呼ばれるようになった。しかし、これらの用語はヨーロッパ人による支配を象徴するため、最近ではネイティブアメリカンという呼称が一般的である。

(p.341)

2013 年段階のものであるが、本当にそうなのだろうか。2004 年 9 月 21 日には国立アメリカ・インディアン博物館 (National Museum of the American Indian) はなぜ、“American Indian” としているのか。実は名称について Native American に変えるかどうかの疑問もあった。しかし、アメリカインディアンの権利運動団体「アメリカインディアン運動」(AIM, American Indian Movement) の結成やその後の運動も見逃せないものがある。

American Indian Movement, (AIM), militant American Indian civil rights organization, founded in Minneapolis, Minn., in 1968 by Dennis Banks, Clyde Bellecourt, Eddie Benton Banai, and George Mitchell. (10)

教科書には“Native American”との表現や先住民ということが強調されているが、1974年に設立された「国際インディアン条約会議」(International Indian Treaty Council)は国際連合経済社会理事会によってNGO団体として認められた最初のインディアン団体であることも見逃せない。1977年の国連会議では「アメリカインディアン」という呼称を支持すると決定し、アメリカインディアンへの呼称に拘る背景もあった。佐藤円「日本における北米先住民研究の歴史と現状」(*Rikkyo American Studies* 29, March 2007)などにより日本での研究状況も整理されつつある。“Native American”なのか、“American Indian”なのかは時代による解釈により異なるかもしれない。また、こうした先住民の取り扱いについて触れれば、当然、日本人としてアイヌの問題を除外して考えることはできないだろう。佐藤の論文でも日本のアイヌ問題との比較考察についても取り上げられている。この問題は過去の歴史ではなく、現在もなお進行している問題なのである。

注

- (1) 「イギリス文化の源流・ケルト文化の取り扱いについて—高等学校から大学へ—」(『新教育課程研究』第3号、武蔵野教育研究会、2018年5月)
- (2) 「アメリカ文化の根底：『人種のるつぼ』から『サラダボウル論』

- 中学校・高等学校から大学へ—」(『新教育課程研究』第4号、武蔵野教育研究会、2018年6月)
- (3) 新村出編『広辞苑』(岩波書店、2018年1月、第7版)に対応したロゴヴィスタDVD-ROMより(頁表記なし)
- (4) Ditto.
- (5) 「インディアン」(<https://ja.wikipedia.org/wiki/インディアン>)
(2018年3月13日アクセス)
- (6) “indian”(<https://ejje.weblio.jp/content/Indian>)(2018年3月13日アクセス日)
- (7) 首相官邸発信「小・中学校教育におけるアイヌに関する教育の充実について」
(<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/ainusuishin/dai9/siryoushu2.pdf#search=%27%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E7%A7%91%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E3%82%A2%E3%82%A4%E3%83%8C%E3%81%AE%E5%8F%96%E3%82%8A%E6%89%B1%E3%81%84%27>)(2018年3月18日アクセス)
- (8) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』(文部科学省、2017年6月)、p.19.
(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/12/04/1387018_3.pdf#search=%27%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E7%A7%91%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E3%82%A2%E3%82%A4%E3%83%8C%E3%81%AE%E5%8F%96%E3%82%8A%E6%89%B1%E3%81%84%27)(2018年3月18日アクセス)
- (9) Ibid., p.101.
- (10) “American Indian Movement”
(<https://www.britannica.com/topic/American-Indian-Movement>)

(2018年3月19日アクセス)

【キーワード】 American Indian、アメリカ・インディアン、Native American、ネイティブ・アメリカン、地理B